

日本語学習者の言語変種の使用率に影響する 言語外的要因

—「一レル」型可能表現を事例として—

辛 昭静

要 旨

本研究では、母語話者の話し言葉に急速に普及する言語変種の例として「一レル」型(ら抜き言葉)を取り上げ、日本語学習者を対象に、インフォーマルな場面での「一レル」型の使用率を調べ、比較を行った。日本語学習者の①日本語学習歴(3年未満/3年～5年/5年以上)、②日本滞在期間(滞在歴無し/1年未満/1年～3年/3年以上)、③母語(中国語/韓国語)、④学習環境(第二言語環境/外国語環境)、という4つの言語外的要因が使用率にどう影響するのか、要因分析を行い、「一レル」型を使用しやすい条件を明らかにすることが目的である。その結果は、次のようにまとめられる。

- (1)「一レル」型の使用率は、日本語母語話者>第二言語環境の日本語学習者>外国語環境の日本語学習者の順であった。
- (2)日本語学習者の日本滞在期間は「一レル」型の使用率にそれほど影響を与えていないが、日本語学習歴及び学習環境、母語が「一レル」型の使用率と深い関係にあることが明らかになった。
- (3)このうち、最も影響が大きいのは、日本語学習者の日本語学習歴という結果が得られた。日本語学習者の学習歴が長くなるにしたがって、「一レル」型を使うようになっていく傾向が読み取れた。
- (4)この結果は、「一レル」型のような言語変種の使用傾向は、日本語学習歴が長くなるにしたがって、母語話者に近づいていくことを示唆するものと思われる。

【キーワード】 学習環境、 日本語学習歴、 母語、 日本滞在期間、 言語変種の使用率

1. 研究の目的

現在の日本語では、とりわけ、社会的バリエーションの変化が急速である。そういう現象の一つとして表現を簡略化・明晰化しようとする傾向が挙げられる。その代表例が一段活用動詞・カ行変格活用動詞の可能表現の「一レル」型(ら抜き言葉)¹である。受身・可能・尊敬・自発の複数の意味を担う「一ラレル」型が使われていたところに、可能専用の「一レル」型が普及する言語変化は、表現の簡略化・明晰化と捉えられる。

この表現に対しては「日本語の乱れ」として批判する声もあるが、文化庁(2001)の「国語に関する世論調査」の結果をみると、「一レル」型を「言葉の乱れ」だと思える人は、全体で 26.6%の少数派である。日本国民の意識は、「一レル」型容認の方向にあると言えよう。日本語研究者の中には「一レル」型の発生・普及を文法的な明晰化と位置づけ、擁護する立場も複数ある(真田・1983、井上・1998 等)。

「一レル」型がさらに普及し、完全に定着すれ

ば、「する」と「来る」を除いた全ての動詞の可能表現が同じルール(「語尾ウ段をエ段に変えて、ルをつける」)で作れる。このルールは、日本語学習者にとって、合理的で習得しやすいと思われる。

「一レル」型について母語話者を対象とした研究はいろいろとなされてきたが、日本語学習者を調査対象としている研究は、わずかである²。そこで本研究では、実際に「一レル」型のような言語変種³が日本語学習者にどれほど浸透しているのか、また、その使用に影響する要因は何かを調査する。

日本語学習者は、その学習環境により、第二言語環境と外国語環境の学習者に分けられる。日本国内で勉強している日本語学習者は、教室外でもさまざまな言語ネットワークを通して、同世代の母語話者が使っている言語変種に接する機会に恵まれ、自然に習得へつながら可能性もあるといえよう。しかし、海外で日本語を勉強している学習者、つまり、習得環境の異なる日本語学習者の場合はどうであろうか。実際筆者も、韓国では「一

レル」型を使ったことがなかったが、日本で生活しているうち、同世代とのコミュニケーションにおいては、「一レル」型使うようになった。習得環境および滞在期間の違いが、言語変種の習得と使用に影響していることは十分予想できる。

また、第二言語習得研究では、習得にかかわる学習者要因として、年齢・適性・動機・態度、学習ストラテジー、性格・情緒、母語、性別、教育経験などが挙げられている。本研究では、この中から学習者の教育経験(学習歴)⁴と母語を取り上げ、日本語学習者の母語や学習歴によって、どのような特徴が現れるかを調査する。

日本語学習者の(1)日本語学習歴(3年未満/3年～5年/5年以上)、(2)日本滞在期間(滞在歴無し/1年未満/1年～3年/3年以上)、(3)母語(中国語/韓国語)、(4)学習環境(第二言語環境/外国語環境)、という4つの言語外的要因が、使用率にどう影響するのか、要因分析を行い、「一レル」型を使用しやすい条件を明らかにすることが、本研究の目的である。

2. 調査の概要

2.1 インフォーマント及び調査実施時期

インフォーマントは、以下のように日本語母語話者、第二言語環境の日本語学習者、外国語環境の日本語学習者の3群である。

I. 日本語母語話者(以下、JNSと称する)

先行研究から、「一レル」型は若い世代の方でより多く用いられることが分かっている(中本・1985、井上文子・1991、加治木・1996等)。それを踏まえ、本研究では、10代後半～20代後半の学生を対象に調査を行った。人数は計96名、平均年齢は22歳である。調査は2001年5月～2002年10月に行った。

II. 第二言語環境の日本語学習者(以下、JSLと称する)

(1) 中国語母語話者(以下、JSL[C]と称する)

中国語母語話者の日本語学習者は、日本語能力試験1級合格以上のレベルを前提とした。国籍・人数は、中国(17名)・台湾(10名)の計27名、平均年齢は25歳である。調査は2001年5月～2002年12月に実施した。

(2) 韓国語母語話者(以下、JSL[K]と称する)

韓国語母語話者の日本語学習者は、日本語能

力試験1級合格以上のレベルを前提とした。人数は計50名、平均年齢は27.1歳である。調査は2001年5月～2002年12月に実施した。

III. 外国語環境の日本語学習者(以下、JFL[K]と称する)

外国語環境の日本語学習者は、韓国語母語話者を対象とする。日本語学習者は、日本語能力試験1級合格以上のレベルを前提とした。人数は計50名、平均年齢は26.5歳である。外国語環境の日本語学習者は、全く日本滞在経験のないグループと日本滞在経験のあるグループの2つに分けられる。日本滞在経験のない人は18名で、日本滞在経験のある人は32名(1年未満の人が24名、1年～3年の人が6名、3年以上の人が2名)であった。経験のある人のほとんどが1年未満のケースである。設問紙調査を行う時点では、すでに韓国で学習を続けている状態であった。そのため、第二言語環境と外国語環境の学習者に区分する際に、彼らは外国語環境の学習者グループに分類した。調査は2002年10月～2003年3月に実施した。

今回、日本語学習者については、十分なインフォーマントの人数を確保することができなかった。そのことが結果にも影響している可能性があるため、今回の調査は実験的な試みとして位置づけられる。

2.2 漫画を用いた「一レル」型の使用率調査

「一レル」型の使用率を調査するため、漫画10場面を用いた。本研究では4コマのうち、可能表現が使われている1コマだけを切り取り、吹き出しの可能表現部分を空欄にし、自分ならどう言うか、そのセリフをインフォーマントに自由に書き込むことを求めた(漫画の具体例は次章を参照されたい)。空欄は、一つの場面に一個付きで、全部で10個であった。

本来、実態調査としては信頼性の面から自然談話を取ることが望ましいが、収集が困難である。また、インタビューして録音する形式にしても、インフォーマントが録音を意識してしまうと、普段通りの言葉遣いでインタビューに応じてくれるという保証がない。しかしながら、先行研究でも多く用いられているような、アンケート調査表に文例を提示し「あなたは、日常、どんな言葉づか

いをしていますか。使う文例には○印を、使わない文例には×印を()の中に入れてください」のような形式では内省による回答となるため、本当の実態とは言い切れない。

そこで本研究では、漫画を利用することとした。漫画を用いたのは、絵で会話の場面と状況を提示できて言葉での説明を避けられるからである。漫画のセリフは書いてもらう形にはなるが、自然な会話体に配慮しながら、一番自然な形で書いてもらえると予想したためである。加えて、漫画を利用することにより、インフォーマントに何の調査をしているのか気付かれにくいという利点もある。

インフォーマントには、普段の表現でセリフを書くよう依頼した。絵を示して質問する方法はすでに『日本言語地図』のための調査でとられている。誘導を避けて、自然な回答を得る有効な方法である。

「一レル」型の使用率には年齢(10代～20代で最も使用率が高い)と会話の相手が重要な要因として働いているという先行研究の結果(木下・1997、山県・1999)を踏まえ、本研究の調査に用いた漫画の場面選定にあたっては、インフォーマルな場面での会話、つまり家族あるいは友人との会話に限定し、セリフの話し手となる登場人物の年齢についてもインフォーマントである20代中心の若い学生たちが容易に自分たちと自己同一化が図れるよう、若い人物が登場する漫画だけを取り上げた。

以上の調査の結果を基に、次章では、日本語学習者の日本語学習歴(3年未満/3年～5年/5年以上)と日本滞在期間(滞在歴無し/1年未満/1年～3年/3年以上)、母語(中国語/韓国語)、学習環境(第二言語環境/外国語環境)が使用率にどう影響しているのかを分析する。

3. 結果と考察

3.1 使用率調査の分析

表1は、インフォーマントが記述した10場面の漫画のセリフにおける、「一レル」型と「一ラレル」型の使用数(使用率)を示したものである。10場面の吹き出しの空欄は、例えば場面(2)では、「ま それであいつの笑顔が()なら」となっている。登場人物は、会社の先輩(男)と後輩(女)の二人である。この先輩は後輩の同僚のことが好きだが、彼女には他に好きな人がいる。彼(先輩)は、彼女のそばに好きな人がいることで彼女の笑顔が見られる(見れる)のであれば自分はそれでいいと言っている場面である。実際の回答では、例えば場面(2)の場合、一段活用動詞の可能表現「見れる」「見られる」以外に、異なる動詞を用いた回答(例:「もどる」)、動詞を用いない回答(例:「明るい」)などもあった。今回の調査ではインフォーマントに、必ず可能表現を使って書くように指示していないため、「一レル」型・「一ラレル」型以外の表現を用いた回答が多く見られた。インフォーマントが何を調査するかに気付いていないまま、漫画の空欄に入るセリフを自由に書くことによって、より実態に近い回答が得られたと思う。

表1の結果は、次のようにまとめられる。

- ①「一レル」型の使用率は、日本語母語話者【JNS】(15.8%)>第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】(14.4%)>第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】(8.5%)>外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】】(4.2%)の順であった。
- ②「一ラレル」型の使用率は、外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】】(25.6%)>第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】(24.4%)>第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】(24.0%)>日本語

表1 【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】の使用数(使用率)比較

インフォーマント(人数)		「一レル」型	「一ラレル」型	その他の表現
JNS(96)		152(15.8%)	216(22.5%)	592(61.7%)
JSL(77)	JSL[C](27)	23(8.5%)	66(24.4%)	181(67.0%)
	JSL[K](50)	72(14.4%)	120(24.0%)	308(61.6%)
JFL[K](50)		21(4.2%)	128(25.6%)	351(70.2%)

* JNS は日本語母語話者、JSL[C]は第二言語環境の中国語母語話者、JSL[K]は第二言語環境の韓国語母語話者、JFL[K]は外国語環境の韓国語母語話者を意味する。
(単位: 個)

母語話者【JNS】(22.5%)の順であった。

③以上、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】の「ーレル」型と「ーラレル」型の使用率の高さを比較した結果、「ーレル」型における順位と「ーラレル」型における順位が完全に逆になっており、反対の使用傾向を示していた。

そこで、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】の「ーレル」型・「ーラレル」型の使用数に対し、 χ^2 検定を行ったところ、次の図1のような結果が得られた。【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】間の結果の詳細は、次の表2のとおりである。

* JNS は日本語母語話者、JSL[C]は第二言語環境の中国語母語話者、JSL[K]は第二言語環境の韓国語母語話者、JFL[K]は外国語環境の韓国語母語話者を意味する。

* χ^2 検定の結果、*n.s.*は関連がみられなかったこと、 $p<.1$ は有意傾向、 $p<.01$ は1%水準、 $p<.001$ は0.1%水準で関連がみられたことをそれぞれ意味する。

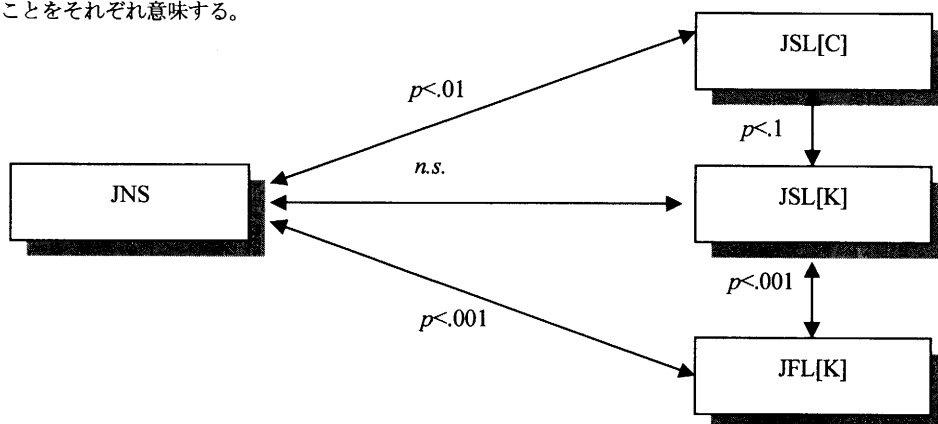


図1 「ーレル」型・「ーラレル」型の使用数の結果に対する χ^2 検定の結果のまとめ

表2 「ーレル」型・「ーラレル」型の使用数の結果に対する χ^2 検定の結果

(1)《母語話者と日本語学習者の比較》	(2)《母語による比較》	(3)《学習環境による比較》
① 【JNS】：【JSL[C】 ⇒1%水準で関連あり $\chi^2(1)=7.25, p<.01$ 。 ② 【JNS】：【JSL[K】 ⇒関連なし $\chi^2(1)=0.76, n.s.$ 。 ③ 【JNS】：【JFL[K】 ⇒0.1%水準で関連あり $\chi^2(1)=35.27, p<.001$ 。	【JSL[C】：【JSL[K】 ⇒有意傾向 $\chi^2(1)=3.69, p<.1$ 。	【JSL[K】：【JFL[K】 ⇒0.1%水準で関連あり $\chi^2(1)=23.17, p<.001$ 。

上記の結果は、次のように解釈できる。

- ① 日本語母語話者【JNS】と最も使用傾向に近いのは、第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】である。
- ② 第二言語環境の日本語学習者【JSL[C]/JSL[K】の可能表現の使用傾向において、母語による違いが若干みられた。
- ③ 第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】と外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】は、可能

表現の使用傾向に違いがあることが明らかになった。

3.2 日本語学習者の属性と使用率との関係

本研究では多くの変量が複雑に個人差に関わっている現象を同時に解析する方法として、林の数量化理論第一類(カテゴリーカル多重回帰分析)を採用した。

分析にあたっては、「ーレル」型の使用率が目的特性であり、この数量データを外的基準とした。

調査対象者は、10 場面における回答のうち、可能表現を 3 つ以上使っている人だけを対象とした。2 つ以下の場合は偶然による結果である可能性が高いと判断したためである。その結果、第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】は 14 名、第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】は 33 名、外国

「一ルール」型の使用率は、10 場面における回答のうち、可能表現だけを取り上げ、その中で「一ルール」型が使われた割合を算出した。

表 3 はカテゴリー内容に対するコード番号を、表 4 は各カテゴリーの頻度(人数)、アイテム・カテゴリー数量、各アイテムのレインジ、アイテム・カテゴリー数量の棒グラフ、重相関係数、平均予測誤差を表示したものである。

<div> <div>カテゴリー</div> <div>アイテム</div> </div>	カテゴリー番号と内容			
	1	2	3	4
1. 日本語学習歴	3年未満	3年～5年	5年以上	
2. 日本滞在期間	滞在歴無し	1年未満	1年～3年	3年以上
3. 学習環境	第二言語環境	外国語環境		
4. 母語	韓国語	中国語		

-13.33 -6.66 0.0 6.66 13.33

.....+.....+.....+.....+.....|.....+.....+.....+.....+

```

1 - 1      14      -13.32506      *****|
1 - 2      24      -4.14895      *****|
1 - 3      37      7.73312      |*****
      レインジ 21.05818

```

2	-	1	13	1.23899	*
2	-	2	17	-2.87835	****
2	-	3	26	4.46355	*****
2	-	4	19	-4.38037	*****
			レンジ	8.84392	

```

3  -  1      47      7.03699      |*****
3  -  2      28     -11.81209     |*****|
      レインジ 18.84908

```

```

4 - 1 61 1.93294 |**
4 - 2 14 -8.42210 |*****|
      レインジ 10.35504

```

外的基準に寄与する度合いの大きさを表すのはレンジである。レンジの大きさの順をみると、日本語学習歴(21.06)、学習環境(18.85)、母語(10.36)、日本滞在期間(8.84)の順になっており、この順序で外的基準に寄与していると判断できる。つまり、「一レル」型の使用率に寄与する属性要因の中では、日本語学習者の日本語学習歴が最も大きく、次が学習環境という結果となった。

(1) 日本語学習者の日本語学習歴と使用率との関係

レンジの最も大きいアイテムである日本語学習歴をさらに詳しくアイテム・カテゴリー数量でみていくと、1-1の3年未満と1-2の3年～5年はマイナスの方向に影響を与え、1-3の5年以上はプラスの方向で影響を与えている。従って、日本語学習歴が長くなるほど、「一レル」型の使用率が高くなると判断できる。

(2) 日本語学習者の日本滞在期間と使用率との関係

日本滞在期間をアイテム・カテゴリー数量でみていくと、2-1の日本滞在歴無しと2-3の1年～3年はプラスの方向に影響を与え、2-2の1年未満と2-4の3年以上はマイナスの方向で影

響を与えている。従って、日本滞在期間は、「一レル」型の使用率とさほどの関係がないと判断できる。

(3) 日本語学習者の学習環境と使用率との関係

学習環境をアイテム・カテゴリー数量でみていくと、3-1の第二言語環境はプラスの方向で影響を与えており、3-2の外国語環境はマイナスの方向で影響を与えている。従って、第二言語環境の日本語学習者の方が外国語環境の日本語学習者より「一レル」型の使用率が高いと判断できる。

(4) 日本語学習者の母語と使用率との関係

母語をアイテム・カテゴリー数量でみていくと、4-1の韓国語はプラスの方向で影響を与えており、4-2の中国語はマイナスの方向で影響を与えている。従って、韓国語を母語とする日本語学習者の方が、中国語を母語とする日本語学習者より、「一レル」型の使用率が高いと判断できる。

「一レル」型の使用率と言語外的要因との関係を図式化すると、次のようになる。

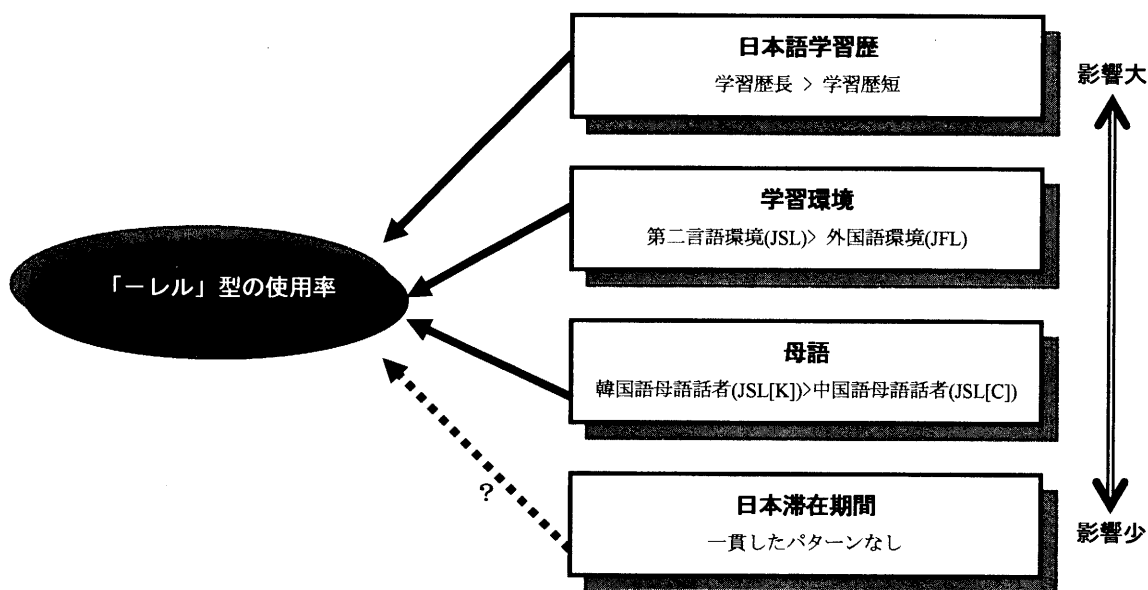


図2 「一レル」型の使用率と言語外的要因との関係

以上のことから、日本語学習者の日本滞在期間は「一レル」型の使用率にそれほど影響を与えていないが、日本語学習歴及び学習環境、母語が「一レル」型の使用率と深い関係にあることが明らかになった。

このような結果が得られた理由として、「一レル」型のような言語変種の使用には学習者の気づき⁵が重要であるということが一つの可能性として考えられる。来日してこのような表現に接した際に、①日本語学習者の「日本語学習歴が長い＝日本語能力がより高い」と予測できるため、日本語能力が高ければ高いほど表現の使用に対する気づきが早い、②外国語環境に比べ、第二言語環境の方がインプットの量が遥かに多いことが学習者の気づきを促す、③日本での滞在期間が長くても学習者の表現に対する気づきが伴わなければ表現への使用にはつながらない、と推測できる。

母語の影響については、次の可能性が考えられる。辛(2005)は、韓国語母語話者【JSL[K】】と中国語母語話者【JSL[C】】の「一レル」型に対する受容態度を比較している。その結果、言語変種に対する受容態度において、日本語学習者の母語による違いはほとんどみられなかったと報告しているが、そのうち、「規範意識」に関する項目だけに焦点を絞ると、『ら抜き言葉』は間違っている(【JSL[C】】33.3%：【JSL[K】】16.0%)『ら抜き言葉』の使用に反対である(【JSL[C】】25.9%：【JSL[K】】8.0%)となっており、このような意識の違いが使用にも影響しているのではないと思われる。

しかし、この点に関しては今度の調査の目的には入っていないため、インフォーマントを対象にフォローアップインタビューを行っていないので、現段階では一つの仮説に留めておいて、次回にその検証に当たりたい。

4. まとめと課題

漫画 10 場面を用いて「一レル」型を使用しやすい条件を調べた結果、次のことがわかった。

(1) 日本語母語話者と日本語学習者との比較

可能表現の使用率を分析した結果、次のことが明らかになった。

- ①「一レル」型は日本語母語話者【JNS】だけではなく、日本語学習者【JSL[K]/JSL[C]/JFL[K】】にも普及していることが確認できた。

- ②「一レル」型の使用率は、日本語母語話者【JNS】(15.8%)>第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】(14.4%)>第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】(8.5%)>外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】】(4.2%)の順という結果が得られた。

- ③ χ^2 検定を行った結果、可能表現の使用傾向が日本語母語話者【JNS】に最も近いのは、第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】であることがわかった。

(2) 日本語学習者の属性と使用率との関係

「一レル」型の使用率を外的基準とし、インフォーマントの属性(日本語学習者の母語と学習環境、日本語学習歴と日本滞在期間)をアイテム・カテゴリーに用いて、林の数量化理論第一類を実施した結果、次のことが明らかになった。

- ①日本語学習者の日本滞在期間は「一レル」型の使用率にそれほど影響を与えていないが、日本語学習歴及び学習環境、母語が「一レル」型の使用率と深い関係にあることが明らかになった。
- ②このうち、最も影響が大きいのは、日本語学習者の日本語学習歴という結果が得られた。
- ③日本語学習者の学習歴が長くなるにしたがって、「一レル」型を使うようになっていく傾向が読み取れた。
- ④この結果は、「一レル」型のような言語変種の使用傾向は、日本語学習歴が長くなるにしたがって、母語話者に近づいていくことを示唆するものと思われる。

2章でも述べたように、今回日本語学習者については、十分なインフォーマントの人数を確保することができなかった。今後はインフォーマントの人数を増やし、今回の結果の追検証を行いたい。

注

1. 一段活用動詞・カ行変格活用動詞の可能表現の変種。「見られる」「起きられる」「食べられる」を「見れる」「起きれる」「食べれる」と表現する現象。一般に、「ら抜き言葉」という用語としてよく知られている。
2. 「一レル」型について、日本語学習者を調査対象としている研究には、以下のようなものがある。
- ①陣内・Irma Hermawati(1994)は、九州大学の日本人学生と留学生を対象に「一レル」型の使用状況を調査している。
- ②辛(2005)は、日本語母語話者と日本語学習者を対象に、

「ーレル」型に対する意識調査(評価と受容態度)を行っている。

これらの研究は、日本語学習者を対象としている点では本研究と共通しているが、陣内・Ima Hermawati(1994)は表現の使用状況を、辛(2005)は表現に対する意識調査(評価と受容態度)を、本研究では表現の使用に影響する言語外的要因(日本語学習歴、学習環境、母語、日本滞在期間)をそれぞれ調査しているので、調査の観点が異なっている。

3. 個人や言語社会に観察される言葉の幅を言語変種(language variety)という。
4. 本研究での学習歴とは、日本の大学院などで各専門の研究をしている場合の期間も含む。しかし、インフォーマントによって解釈が異なる可能性があることは否めない。
5. Schmidt は、認知能力中の気がつくこと(noticing)を重視し、インプット中に見られる形式に注目することが言語習得に必要なだと考えた。

参考文献

- 井上史雄(1998)「ラ抜きことばの背景」『日本語ウォッチング』岩波新書 2-31.
- 井上文子(1991)「男女の違いから見たことばの世代差“標準”意識が男女差をつくる」『月刊日本語』6月号アルク 14-18.
- 加治木美奈子(1996)「“日本語の乱れ”意識は止まらない

～第10回現代人の言語環境調査から②～」『NHK放送研究と調査』46巻9号 日本放送出版協会 60-62.

木下哲生(1997)「漫画における『見える』の現状と用法の広がり」『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』75, 61-98.

国立国語研究所(1966-1974年、縮刷1981-1985年)『日本言語地図』国立国語研究所報告 30-1～6 大蔵省印刷局

真田信治(1983)『日本語のゆれ』南雲堂 86-89.

辛昭静(2004)「日本語教育における言語変種の受容・普及に関する社会言語学的研究—『ーレル』型可能表現を事例として—」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文

辛昭静(2005)「言語変種に対する意識調査—『ーレル』型可能表現を事例として—」『言語文化と日本語教育』30, 41-50.

中本正智(1985)「東京語のゆれについての考察」『東京都立大学人文学会 人文学報』173, 164-168.

文化庁(2001)『平成12年度 国語に関する世論調査〔平成13年1月調査〕—家庭や職場での言葉遣い—』財務省印刷局

山県浩(1999)「群馬県の大学生にみる〈ラ抜き言葉〉—10年の変化相を中心に—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』48, 167-188.

しん そじょん／韓国外国語大学校外国語研修評価院
sojung33@hotmail.com

Extra-linguistic determinants of linguistic variation frequencies of Japanese learners — the case of the ‘ra-nuki’ potential form (innovative potential forms) —

SHIN Sojung

Abstract

This study examines the case of ‘ra-nuki’ verbs (innovative potential forms) as an example of language variations spreading steadily in conversational speech among native Japanese speakers. A comparison of the rate of use of ‘ra-nuki’ verbs by Japanese learners (i.e. learners of Japanese as a second vs. foreign language) in informal situations is conducted. In addition, it is conducted to see how the following four extra-language factors influence the rate of use: 1) how long the Japanese learner has studied the language (3 years or less/3-5 years/5 years or more), 2) length of stay in Japan (none/less than 1 year/1-3 years/3 years or more), 3) native language (Chinese/Korean), and 4) learning environment (in the second language -- i.e. in Japanese/in a foreign language). The study then clarifies what language context facilitates the learning of ‘ra-nuki’ verbs.

The usage rate of ‘ra-nuki’ verbs follow this sequence: native speakers > learners of Japanese as a second language > learners of Japanese as a foreign language. Lengths of learners’ residence in Japan does not have a significant influence on their ‘ra-nuki’ usage rate, but the Japanese learner’s length of learning the language, the language study environments, and the native languages are strongly related to the ‘ra-nuki’ form use. Generally, a long-time learner tended to use ‘ra-nuki’ forms more often, to gradually assimilate native speakers’ performance.

【Keywords】 learning environment, length of learning the language, native language, length of stay in Japan, usage rate of language variations

(Hankuk University of Foreign Studies, Foreign Language Training and Testing Center)